

ドイツの経営経済学会第79回年次大会は、2017年6月7日(水)～9日(金)、スイスのザンクト・ガレン大学で開催された。ザンクト・ガレン大学では、1992年に年次大会が開催され、それは筆者が会員となった思い出深い大会で、25年ぶりのザンクト・ガレン大学は相変わらず山の頂上にある、行くのがなかなかきつい大学であった。今大会は、日本からの参加者は、国土館大学の桜井教授、中央大学の加治教授、そして筆者の計3人であった。

筆者は前述の通り1992年以来この学会の会員で、1994年のパッサウ大学での年次大会以来、今年で24年連続で参加し、この間1995年(トリアー)、1998年(ウィーン)、2003年(チューリヒ)の3大会で発表を行った。そして今年、14年ぶりに再び発表を行うことができた。発表のタイトルは Die Rezeptionsgeschichte der deutschen Betriebswirtschaftslehre in Japan で、日独の経営経済学の交流の歴史である。元々は2015年9月にハンブルグ国防大学で「ドイツ経営経済学の精神」というテーマで行われたこの学会のコンファレンスで「日独の経営経済学の交流の歴史」というタイトルで発表するように言われ、私がそこで行った発表の原稿に手を加えて話したのである。ザンクト・ガレンでは、6月8日にやはり「ドイツ経営経済学の精神」というセッションで、アーノルド・ピコー(ミュンヘン大学)、ウテ・シュミール(ドゥイスブルグ・エッセン大学)、小山の3人が各テーマで話した。

年次大会は、“From Insight to Impact – Erkenntnis mit Wirkung (knowledge with action)”という全体テーマの下で開催された。そこでの焦点は、実務にとっての大学での研究の重要性と、科学と実務をより密接にできる可能性についてである。そこで、とりわけ次の諸疑問への答えを考えた；

- ・経営管理研究の知識はいかに執行役員たちに伝達されうるか？
- ・大学での専門知識を、特に科学と実務にその恩恵が同時に発生するように結び付けさせるにはどうしたら良いのか、どのような内部組織構造とビジネスモデルが大学にあるか？
- ・コンサルティング的研究は大学での研究よりも効果的なのか？
- ・MOOC他のオンライン教育法は古典的な大学での教育と競い合えるものか？

大学での経営学教育についての考察はドイツでもすでに過去多く行われている。このテーマについても筆者は過去の年次大会での議論に接しているが、ドイツの大学(Universität)と専門単科大学(Fachhochschule)の違いについては、後者は「学校(Schule)」で、練習問題を宿題として多数受け、家でこなしてくる場所だ、という認識が往々にして聞かれる。これが、昨今のようにマーケティングや経営戦略が経営学の学生に大人気となり、いわば理論自体よりもその適用例に、より注目が集まると、まさに大学と専門単科大学の区別は難しくなり、今度の上記のテーマでの発表を聞いても、実はすでにこの2者の区別は曖昧、あるいはかなり同化しているイメージを持つことになる。これは致し方のないことであろう。

来年はマグデブルグ大学、その次はロシュトック大学ということになっている。来年から

2年間、旧東ドイツの大学で、しかも年次大会は共に初めての開催となる大学で行われるのは興味深く、東西統一後一定時間経過後の旧東の大学の実情を知る良いチャンスと思われる。